朝鮮石人像を訪ねて（36）

深田　晃二

☆　忠清南道・公州訪問　☆

今年の韓国群山合宿には集合当日の4月17日（金）午前便でソウルに到着した。集合時間まで６時間少々あるので、直接に群山に行く計画を急遽変更し欲を出して、足立さんからもらったバス乗り場情報をたよりに、武寧王陵のある公州に行くことにした。王陵と名が付くと石人像の存在を求めて興味をそそられるのである。

ソウル行きとは道が違い、仁川大橋を渡り安山から南に向かうコースである。仁川大橋は2009年10月の開通記念マラソン大会で韓国のマラソンクラブ（一山湖水MC）メンバーや宮川さん達と一緒に走った所であり（上の写真）、懐かしさと親しみを感じた。

仁川空港から安山-華城-平沢-天安-公州の１時間５５分、19,300wonの高速バスの旅は、乗客は私１人だけ、かつノンストップの優雅で快適な旅だった。

公州のバスターミナルに着きタクシーで博物館に向かう途中、城壁が優雅な曲線を描く魅力的な公山城が目に入るが、急ぎの旅につき次回の楽しみに。

☆　百済と公州　☆

百済は、BC１８年に温祚王が漢城（ソウル）を都とし建国したが、４７５年に高句麗に攻撃され、廃墟となった漢城を後にして熊津（現在の公州）へ遷都を行った。５代６３年にわたる百済の国力再興の土地である。その後、扶余に遷都したが、６６０年に新羅に攻められ、宮女３千人が華のように飛び散った落花岩に象徴される様に悲惨な最期を遂げた国である。

今回の旅では、益山の王宮里を訪ねたが、武王（在位600年-640年）の時代の王宮は益山に有ったと言うことを初めて知った。

６６３年には日本の天智天皇が援軍を出して新羅・唐連合軍と戦い白村江で破れた。今回、群山港のビル屋上から見たから錦江（白馬江）の河口付近が白村江だとのことである。

その後百済の地から逃れてきた有力者、技術者が多く日本に渡ってきたことは承知の通りである。また新羅の追討軍が来ることを想定し、迎え討つために岡山の鬼ノ城を始め瀬戸内海から大和各所に防衛のための山城を築いたことも有名な話しである。

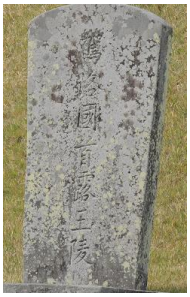
☆　武寧王陵　☆

武寧王陵は1971年7月に宋山里古墳群の6号墳の漏水補修工事中に偶然発掘されたそうだ。墓の主人公が記録された墓誌石が出たので、百済第25代武寧王（在位501年～523年）である事実が明らかになったという。築造型式は中国南朝型式のレンガ積の墓（塼築墳）である。

公州博物館には金銀の装飾品や各種器・中国陶磁器等武寧王陵出土の多くの貴重な遺物が展示してある。博物館から裏山の散策コースを登っていくと宋山里古墳群あり、その中に武寧王陵がある。本物の中には入れないが、模型館があり疑似体験できる。

古墳群には大きな土饅頭型の墓が数基有るが、どれも墓前に広場とか石物はない（下写真左）。武寧王陵には１体の奇怪な石獣（下写真右）が副葬されていただけであるという。

一昨年訪問した慶尚南道の加羅・首露王（１～２世紀）の復元墓所には石人像が建ててある（下写真２枚）。時代的に500年ほど先立ち、さらに石人像発祥地中国から遠い加羅の墓所に石人像があり、６世紀の武寧王陵にない理由については、文化の伝承ルートや発掘調査結果などの検討をしないと分からない。



☆　伝説の時代　☆

手持ちの年表をめくると不思議なことが分かってくる。紀元前６００年位から中国朝鮮日本の年表で支配者の在位年数を見ると１代の王は長くて５０年、平均２５～３０年ぐらいであり、現代の世代交代サイクルとほぼ等しい。

新羅の太祖・赫居世は在位６０年、加羅の太祖・首露王の在位は１５７年（ありえない）、日本の初

代神武天皇は７６年（これも昭和天皇の６３年と比較するとあり得ない）、垂仁天皇は９９年、戦前三韓征伐をしたとして皇国史観の論拠となった摂政神功皇后（じんぐうこうごう）は６９年など、現在の平均寿命からしても疑問符が付く在位期間がいっぱいある。即ち、これらは神話の時代と位置づけて間違いないということであり、これらの人物の存在を根拠に論ずるのは細心の注意が必要と言うことになる。

先ほどの首露王陵の石人像も疑って掛かる必要があると言うことだ。

☆　公州から群山へ　☆

足早に公州の見学をおわりバスターミナルに引き返して群山行きのバスを探したが無い。売り場で聞くと論山まで行くと有るというので乗り継いで行くことにした。論山できっぷを求めたがここでも「群山行きのバスはない」「隣町の舒川（ソチョン）行きがある」という。仕方なくバスを待つ。地図で見ると直線距離は近く３０分程度の遅刻で済みそうだ。が、実際には北に半円を描くように扶余経由でのコースであった。扶余のバス停に着いたと分かった時、集合時間大幅遅刻が確定的となった。

舒川の町中では渋滞に遭うし、どんどん遅れる。やっとタクシーに乗り換えて群山のホテルに向かった。足立さんからホテルの名刺をもらっていたので大いに助かった。約３０分、２万５千 won でホテルに到着。１時間半の遅刻であったが、途中で２回ほど飛田さんに電話連絡を入れたので心配され度合は比較的少なかったのではと思っている。

☆　景福宮内の民俗博物館内　☆

フィールドワークの内容はメイン論文にお任せして、４月２０日（月）に以前から聞いていた景福宮の民俗博物館の石人像を見てきた。景福宮の入場は６５歳以上は無料とのことなので、パスポートのおせわになった。民俗博物館内には石羊２体と文人像（波形帽）２体が展示してあった。文人像のかぶっている冠を「梁冠(ヤンガン양관)」と説明してあるが、本シリーズでは縦縞の冠をヤンガンと定義しており矛盾があるが、その違いが分からない。

☆　民俗博物館の周囲（１）　☆

館外には十二支像を初め多くの造形物が展示してある。童子石、ボクス、文人石の像がまず目に入る。これらの寄贈者はここでも千信一氏である。説明文には、

童子石：寺院に安置する神像、または墓の前にあった文人石（石像）の代わりとして立てた石像。

ボクス：長丞（チャンスン、トーテムポール、里程標としても使用）の一種として村や寺院の入り口に立てられ、境界線を表したり、守護神の役割をした民俗信仰の象徴。

文人石：死人を守ために墓の前に立てた石像。

とある。

☆　民俗博物館の周囲（２）　☆

博物館の南庭園には石の道祖神、ハルモニ石仏、性器崇拝信仰石物など多彩な石物が展示してあり楽しめる。

東南庭園には大量の石人像・石物がある。左の写真の中央の四角い石の名前は、床石（中国語）、サンドル(日本語)、산돌(韓国語)とあり、サンソクではなくサンドルと呼ぶのが正式なようである。重箱読みである。

「墓の前に幅広の長方形の石で設けられる膳で、この上に供え物や香炉がのせられる。」と説明がある。

☆　おわりに　☆

飛行機の窓から島根・木次の町を見たこと、群山の案内を丁寧にしていただいたこと、足立邸に止めていただいたこと、益山の古跡を回ったこと等新知識の収穫と感謝の気持ちの多い旅であった。　　(続)